

地域貢献

純真学園大学の地域貢献への取り組み
— 公開講座・学術講演会・サイエンスキャンプ —

井手口 忠光

純真学園大学 保健医療学部 放射線技術科学科

Efforts contributed regionally by Junshin Gakuen University
— Academic lecture meeting/ Science camp —

Tadamitsu IDEGUCHI

Department of Radiological Science, Bachelor of Health Science,
JUNSHIN GAKUEN UNIVERSITY

【要旨】

教育基本法の改正により大学が果たすべき役割として「教育研究の成果を広く社会へ提供すること」が新たに位置付けられ、地域の発展を図る上で「知の拠点」としての大学による地域貢献に大きな期待が寄せられている。平成23年に開学した純真学園大学は、保健医療を専門とする新設の大学として、「公開講座」「学術講演会」そして「サイエンスキャンプ」という、3つのイベントを通して地域社会に貢献している。「サイエンスキャンプ」では対象を福岡県内の高校生そして中学校の理科教諭に対して本学教員により、医療・科学分野における専門的な講義や演習を、また開学3日目より始めた公開講座でも本学教員による専門領域での講義を通して、地域住民を対象とした健康増進につながる情報の提供を行ってきた。学術講演会では、世界の最先端で活躍されている講師を学外より招聘して、九州地域における臨地実習先の先生方を対象とした、より専門的な学術情報の提供を行ってきた。それぞれ聴講対象やテーマは異なるものの、広義の意味では保健医療の専門大学として「知の還元」を行い、地域住民の健康に貢献していると考えている。今後、5年、10年そして15年と時代の要請に合わせてテーマや内容など対応・変化させながら、この3つの事業を継続していくことで、真に地域社会への貢献ができたといえよう。

キーワード： 地域貢献 知の還元 医療専門職 人材育成 学園訓

1. はじめに

平成20年度文部科学白書¹⁾において、教育基本法の改正およびこれを踏まえた学校教育法の改正により大学が果たすべき役割として、学術研究、人材育成に加え「教育研究の成果を広く社会へ提供すること」が新たに位置付けられた。地域の発展を図る上で、「知の拠点」としての大学による地域貢献に大きな期待が寄せられている²⁾。

各々の大学においてその専門性を生かした地域貢献の方法が考えられるが、従来の大学が果たすべき役割である地域を支える専門人材の育成も、その一つである。近年、特に周産期や救急患者の受け入れ機能が不十分であるなど、地域医療の崩壊が大きな社会問題となっており、地域医療の担い手となる医師の他、看護師を含め医療関係の専門人材の養成は、地域貢献の大きな柱であることは間違いない³⁾⁻⁶⁾。

本学の創設者である福田昌子女史は産婦人科医としての豊富な医療経験と知識を活かして、昭和40年に全国で2番目となる看護科を純真女子高等学校に開設し、高等学校の准看護師養成課程として九州で最も古い伝統を誇る。平成14年には看護専攻科を設置し、現在までに卒業生は千数百名を数え、各々が准看護師・看護師として医療の最前線で活躍するとともに地域医療に深く貢献している。

近年の急速な医療技術の進歩は、医療の専門化・細分化を招き、医療は複数の医療専門職の知を集結しなければ、その実施が困難となっている⁷⁾。単に病気を治すだけでなく、どのような診断・治療そしてケアが行われるか、医療の質そのものが大きく問われるようになった。

そのような背景のもと、本学園は保健・医療・福祉の分野において社会の要請に応え得る専門的知識・技術・態度を兼ね備えた人材の育成を目的として、看護学科、放射線技術科学科、検査科学科、医療工学科の4学科を備えた保健医療学部の設置を計画した。そして、平成23年に文部科学省より設置認可を受け開学し、平成28年度には6年目を迎えることとなる。

このような経緯で開学した純真学園大学は、建学時の「気品」「知性」「奉仕」の精神を受継いだ保健医療を専門とする新設の大学として、どのように地域貢献を行うべきかを検討してきた。そのなかで特に、医療科学分野の知の還元を核とした「公開講座」「学術講演会」そして「サイエンスキャンプ」を3つの柱として企画して開催することとした。毎年メインテーマを決めて各々の企画イベントを開催し、保健医療の知の拠点として地域住民の健康・予防医学の啓発活動という奉仕の精神で地域貢献をおこなっている。そこで、本紙面において本学の代表するそれら3つの企画イベントを説明し、本学の地域貢献活動を紹介したい。

2. 公開講座

まず初めに本学で取り組む地域貢献の一つ、公開講座を紹介する。大学の知的資源の地域社会への還元として、平成20年度文部科学白書¹⁾では1. 正課教育の開放（社会人特別選抜、科目等履修生、昼夜開講制等）、2. 公開講座や高校への出前授業など正課教育以外の教育活動、3. 大学の人材の提供（審議会や委員会等、学外での講演会・研修会等の講師活動等）、4. 施設の開放（図書館や体育館等の開放）、5. 共同研究・受託研究や技術移転事業等の産学連携活動等をあげている。

特に2. の公開講座は、各大学の専門性や特色を生かした内容を講座として開講でき、課内講義の延長線上として、企画・検討そして実施しやすく全国でほとんどの大学が取り組んでいる。私立大学（短大・高専含む）では約80%の大学が各々の専門性を生かした講座を開講し、平成19年度の資料では私立大学の講座数だけでも26,259講座とかなりの数が計上されている（表1）。他大学の公開講座の資料を見ると、一つのテーマ（講座）に対して3～5回のコマに分けた講座を開講しているものが多く見受けられる^{8) 9)}。本学では、開学3年目にあたる平成25年度に第1回公開講座を企画して学園祭と同時期に開催した。他大学と異なる点は、講義の延長としての講座ではなく、本学教員の専門とする分野から、地域の方々に役立つ医療における検査や治療、疾病の予防につながるテーマを取り上げ、一般の方目線でわかりやすく、講演形式で実施することにある。公開講座は、以下の項目を基本的な柱（コンセプト）とし毎年、企画・開催することとしている。次に第1回から第3回までの公開講座の内容を簡単に紹介する。

表1 公開講座の開設状況（平成19年度）

	国立	公立	私立
開設学校数	138校	100校	777校
開設講座数	2,113講座	1,775講座	26,259 講座
受講者数	140,557人	105,847人	1,035,815人

※平成20年度文部科学白書 第1部第2章第2より

公開講座のコンセプト

- 1) 基本的に本学教員が講師を務める
- 2) 地域貢献に結びつく大きなテーマを決め、それに沿った講演テーマとする
- 3) 教員の専門分野、テーマを把握し、講師を決定する
- 4) 聴講対象は一般市民、近隣地域住民

初回となった公開講座のメインテーマを、HPV ワクチンによる一次予防が可能となった開催年度の社会的背景より子宮頸がんに着目し、「子宮頸がん撲滅に向けて」と掲げた。表2に第1回公開講座のプログラムを示す。

表2 第1回公開講座 プログラム

日 程	プログラム タイトル	時間	概 要
平成 25年 10/28	開会の挨拶	10分	純真学園大学学長 福田 庸之助
	講演 1	50分	演題 「新しい細胞診で進化する子宮癌検診」 講師 伊藤 裕司先生 純真学園大学医療工学科特任教授/医師
	講演 2	50分	演題 「子宮頸癌の臨床の実際」 講師 蓮尾 泰之先生 国立病院機構九州医療センター産婦人科医長
	発表	10分	子宮癌検診の体験発表 池田朋世さん 純真学園大学 看護学科3年生
	講演 3	50分	演題 「あたし子宮がなかばってん笑うて生くばい！」 講師 宮部 治恵先生 がんサポーター代表
	総合討論	30分	会場からの質疑 応答など

開催初年度は、多くの参加者を見込み純真学園大学・学園祭の日程に合わせて会場も1200名収容可能な純真ホールに設定した。さらに学園祭イベントとしてこの公開講座と共に、子宮頸がん検診車を学内に駐車し大学生の検診の勧奨も行った(図1)。公開講座ではそれぞれの専門の立場から、子宮がん検診の重要性やHPV ワクチンによる副作用の問題、子宮頸がんの進行と治療について講演された。また、学生発表は産婦人科での検診に対する羞恥心がいかに強いかを伝えてくれる内容だった。最後に宮部先生からは子宮頸がんを患い死と向き合う経験をされ、「Cancer Gift」という言葉で今現在の胸中を語られた。図2に第1回公開講座の写真を示す。とても有意義な内容であったが、学園祭のステージ企画と時間が重なり学生の参加が31名と非常に少なく、また学外からの参加も44名と予想した参加者数には及ばなかった。参加いただいた保護者からのアンケートでも、「多くの学生に聞いて欲しい内容だったので、参加者が少なくて残念です」とのコメントを頂いた。ただ幸いなことは、子宮頸がん検診車には60名以上の女子大学生が列を作って受診する光景を見ることができ、このイベントの一部は成功したといっていだろう。第1回の反省を踏まえ委員会で検討し、次回からの公開講座の開催日程を学園祭と分離して、11月末から12月上旬に開催することとした。また第2回の会場は、参加いただく地域住民の方々と講師がより近い距離で質疑応答もできるように、収容人数120名程度の3号館の講義室4に設定した。

第2回、および第3回の公開講座のプログラムを表3と表4に、また開催案内ポスターを図3に示す。第2回のメインテーマは「明日から使える家庭の医学」と題し、本学の4学科(看護、放射線、検査、医療工)の教員を講師として、それぞれの専門分野におけるメインテーマに則し講義頂いた。血圧計のマンシェットの正しい巻き方(図4、5)、尿は色を注意するだけで自分の健康状態がわかること、そして薬

局で買うことのできる尿試験紙の話など、参加者からはとても好評であった。さらに、医用画像（レントゲン）の話では「病院では詳しく説明してくれないので勉強になった」との声、AEDではこういった講習を毎年1回は受けることで「イザ」というときに躊躇なく使えと、アンケートのコメントもいただいた。第2回の参加は、一般の方24名に教職員17名（合計41名）と、少ない参加者数であったものの、当初の目的通り講師とより近い距離での講座となった。

第3回の公開講座はメインテーマを「乳がんの早期発見と治療について」と題して開催した。平成27年度はメディアで乳がんが取り上げられる機会が多く、社会的な関心も高いことから多くの参加者も見込まれた。講師も本学の教員だけでなく、九州医療センターから乳腺センター副部長の医師に基調講演をいただき、その後、本学教員による各専門分野の講演を行った。画像診断や細胞からの診断アプローチ、そして実習用のファントムを使った自己触診の演習など、非常に役立つ講演でアンケートからも高い評価をいただいた。最後に質疑では現在、乳がん治療中の方、マンモグラフィーなどの検査をすでに受けられた方など、体験を踏まえた上での質問で非常に真剣になされていたのが印象的であった。今回の参加は一般の方34名と教職員20名（合計54名）の参加者数で、昨年よりわずかであるが多くの方に来場頂いた。また、昨年同様に講師とも、より近い距離で活発な質問が行われた公開講座であったと思う

表3 第2回 公開講座 プログラム

日 程	プログラム タイトル	時間	概 要
平成 26年 12/4	開会の挨拶	10分	純真学園大学学長 福田 庸之助
	講演 1	30分	演題 「血圧測定と値の読み方」 講師 二重作 清子先生 純真学園大学看護学科教授
	講演 2	30分	演題 「尿だけでこんなにわかる健康状態」 講師 中野 智裕先生 純真学園大学検査科学科准教授
	講演 3	30分	演題 「健康診断のレントゲン検査でわかること」 講師 新井 正一先生 純真学園大学放射線技術科学科教授
	講演 4	30分	演題 「救急救命装置 AED の正しい使い方」 講師 大石 義英先生 純真学園大学医療工学科教授

表4 第3回 公開講座 プログラム

日 程	プログラム タイトル	時間	概 要
平成 27年 12/11	開会の挨拶	10分	純真学園大学学長 福田 庸之助
	基調講演	50分	演題 「進歩する乳がん検査と治療」 講師 名本 路花先生 国立九州医療センター乳腺センター副部長/医師
	講演 1	30分	演題 「マンモグラフィー検査」 講師 新井 正一先生 純真学園大学放射線技術科学科教授
	講演 2	30分	演題 「しこりがみつかった後の検査」 講師 中野 智裕先生 純真学園大学検査科学科准教授
	講演 3	30分	演題 「乳がんにならないために、そして乳がんと診断されたら」 講師 内山 久美先生 純真学園大学看護学科教授



図1. 学内に配置した子宮頸がん検診車



図2. 第1回 公開講座の様子（講演1）



図3. 公開講座の案内パンフレット 左：第2回 右：第3回



図4. 第2回 公開講座の様子：講演1



図5. 血圧計を扱う参加者



図6. 第3回公開講座：基調講演



図7. 質問中の一般市民

(図6, 7). 各回の講演内容の詳細は、本学が発刊している広報誌「純真の翼」に掲載しているので参照されたい. 公開講座の地域住民への広報は、本学のHPへ掲載するとともにポスターを作成し、本学の学舎がある福岡市南区の区役所・総務部企画振興係にも協力を頂き25の公民館へのチラシの配布、南区役所内の広報BOXへの案内チラシの設置、そして市政だよりや、南区だよりへ掲載をお願いし、広報活動を行っている.

3. 学術講演会

学会や研究会企画での学術講演会は数多く見受けられるが、本学のような地域貢献の目的で大学が企画し開催しているところは数少ない. 先に紹介した公開講座は、聴講対象を地域・近隣住民、福岡市民とし、本学教員の研究や専門分野を中心とした内容をわかりやすく噛み砕いて、一般市民の方に伝える企画である. 一方、この学術講演会は聴講対象を臨地実習先の医療専門職や臨地教授などの専門の先生方、そして本学の教員および学生としており、よりアカデミックで最先端の研究を紹介する講演会として企画、開催している. したがって、講師はその専門分野において第一線で、世界的に活躍されている著名な方を迎え、講演をいただくことが大きな特徴でもある.

以上のようなコンセプトを基に初会の学術講演会は、開学3年目にあたる平成25年度に開催した. 大会テーマを「先端医療技術の開発と将来展望」と掲げ、2名の著名な先生による講演を行った. プログラムを表5に、広報委員会で作成したポスターを図8(左)に示す. 東北大学百生先生の最先端の研究内容はTV番組でも、乳がんを一目で突き止める『スーパーレントゲン』として紹介されている. 講演ではその原理から、研究開発における苦労話、そして最新の研究成果も提示された. 続いて九州大学病院の富永先生は、人工心臓は拍動流である必要はなく、定常流型は音も静かで故障しにくく大幅に生命予後を改善する、という最新の結果を示された. 初回の学術講演会は大会テーマにふさわしい先端医療技術であり、非常に興味深く勉強となった. アンケート調査でもそのような多くの感想が寄せられ、成功裏に終わったと思う. ただ、当日の参加者人数の合計は480名と多くの参加を頂いたが、学外からの参加者は64名と残念ながら予想していた人数より少なかった.

広報委員会にてこの学術講演会の企画を行っているが、「放射線と臨床工学の領域」そして「看護と検査の領域」を隔年で交互に開催することとしている. 第2回目となる平成26年度は看護学科そして検査科学科の領域を中心とした講演でプログラムを構成し、メインテーマを「先端医療の研究開発と将来展望2」と題した. プログラムを表6に、広報委員会で作成したポスターを図8(右)に示す.

東京大学の真田先生は褥瘡の研究を通して「看護ケアを科学する方法論の構築」を講演され、聴講していた臨地実習先の先生方、そしてわれわれ大学教員にとっても研究の取り組み方は大変勉強になった.



図8. 学術講演会の案内ポスター 左: 第1回 右: 第2回

表5 第1回 学術講演会 プログラム

日程	プログラム タイトル	時間	概要
平成 26年 2/15 (土)	開会の挨拶	10分	純真学園大学学長 福田 庸之助
	講演 1	80分	演題 「乳癌早期発見！スーパーレントゲンの開発と実用化に向けて」 講師 百生 敦 先生 東北大学多元物質科学研究所 教授
	講演 2	80分	演題 「人工臓器の臨床応用と将来展望－人工心臓を中心に－」 講師 富永隆治 先生 九州大学病院副病院長 教授

表6 第2回 学術講演会 プログラム

日程	プログラム タイトル	時間	概要
平成 27年 2/21 (土)	開会の挨拶	10分	純真学園大学学長 福田 庸之助
	講演 1	80分	演題 「看護ケアを科学する方法論の構築－褥瘡ケアの体系化を目指して」 講師 真田弘美 先生 東京大学大学院医学系研究科 老年看護学／創傷看護学分野 教授
	講演 2	80分	演題 「i P S細胞の未来－難病治療へのチャレンジ－」 講師 江良沢実 先生 熊本大学 発生医学研究所 教授



図9. 第1回学術講演会の様子：講演1



図10. 第1回学術講演会の様子：講演2



図11. 第2回学術講演会の様子：講演1



図12. 第2回 学術講演会：質問する学生

そして研究に対する姿勢、やり遂げるための熱い情熱に多くの参加者が感銘をうけた。

熊本大学の江良先生は、iPS細胞でノーベル賞受賞という社会的反響が大きかったこの時期に、本学にてES細胞そしてiPS細胞について丁寧にそしてより深く専門的に解説して頂いた。血液1滴でも、iPS細胞を簡単に作ることが可能で、人間のどの細胞になりうることなど講演された。日本におけるこの分野は世界の最先端を走っているという、まさに学術講演会のメインテーマにふさわしい内容であった。第2回の参加者は、総勢543名と第1回よりも多くの参加を頂いたが、学外の方の参加は43名と第1回目より減少となった。図9～図12に第1回および第2回の学術講演会の写真を示す。

学術講演会の広報は、本学のHPへ掲載するとともにポスターを作成し、臨地実習先の病院および福岡市内の病院へダイレクトメールにてお知らせをしている。また、技師会や看護協会の後援を頂いてHPへの掲載、そしてメディアでは西日本新聞や福岡市の市政だよりにて広報を行っているが、参加者の大幅増加につながる成果は上がっていない。

4. サイエンスキャンプ

サイエンスキャンプは、1995年の夏に科学技術庁（現在の文部科学省）がスタートした、高等学校、中等教育学校後期課程、高等専門学校（1～3学年）等に在籍する生徒を対象とした次世代人材育成事業としての先進的科学技术体験合宿プログラムである。2003年の春休みからは民間企業の研究部門や大学の理系学部、大学附属の研究所が会場に加わり2006年からは、文部科学省の外郭団体である科学技術振興機構（JST）が主催して年3回に分けて開催している。平成26年度までの20年間で、のべ1,000以上の会場で開催され、約15,000人の高校生が参加していると報告されている¹⁰⁾。JSTのホームページには事業の目的として、次世代科学技術イノベーションを創出する人材育成のため、子供たちの才能を伸ばし理数好きの子供たちを拡大し、さらに国際的に活躍できる人材を育成する、と述べている¹⁰⁾。

世界中から研究者が集う、大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構（KEK）でも、KEK ウィンター・サイエンスキャンプと題し、全国の高校生がKEKつくばキャンパスにおいて、素粒子の研究現場を訪れ、研究の魅力や楽しさを体験したことや学んだことが、ホームページで紹介されている^{11) 12)}。

そのような社会的背景のもと、純真学園大学でもいち早く開学2年目の2012年より「純真学園大学サイエンスキャンプ」を実施している。本学が取り組むサイエンスキャンプの特徴は、本学の先進的な研究テーマに取り組む教員が協力して、高等学校に在籍する1～2年生を対象とした先進的科学技术体験プログラムとしている¹²⁾。また、2013年より福岡市教育委員会の後援を得、さらに2014年からは福岡市南区、西日本新聞社の後援を得て、地元地域への社会的貢献をコンセプトに実施している。メインテーマは「生命を科学する」と題し、毎年度、臓器を特定しサブテーマを決めている。初年度の平成24年度は「心臓」、25年度は「腎臓」そして26年度、27年度は「肺」そして「脳」をテーマとして実施した。参加人数は、初年度は7名、25年度も7名そして26年度の学生参加は8名とほぼ変わらず推移していたが、26年度は中学校教諭が9名参加され、合わせて17名となった。そして平成27年度は学生が20名、中学校教諭が25名もの参加者が得られるまでになった。参加者は、本学に設置されている最新の医療機器や用意された動物臓器（ブタ）などに触れながら、体験学習をおこなった。アンケート結果でも毎年、非常に高い評価を頂いている。図13にはサイエンスキャンプの案内ポスターを、そして図14-18には参加者の受講中の写真を示す。各年度における詳細な内容は、純真学園大学雑誌4号¹²⁾に紹介されているので参照されたい。

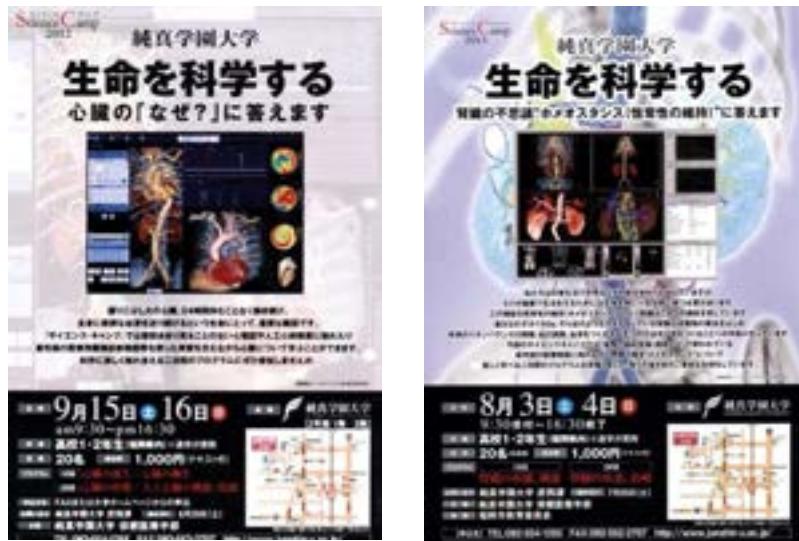


図13. サイエンスキャンプの案内ポスター 左：第1回 右：第2回



図14. 副学長による講義



図15. 血圧測定の実習 (看護学科)



図16. 画像診断装置による実習 (放射線技術科学科)



図17. 血液浄化装置による実習 (医療工学科)



図18. ブタの腎臓を使った実習 (検査学科)

5. 考 察

純真学園大学の地域貢献への取り組みとして公開講座・学術講演会・サイエンスキャンプを紹介した。2008年の文部科学白書の第2節－地域の発展における大学の役割として、地域の発展を図る上で、「知の拠点」としての大学による地域貢献に大きな期待が寄せられていることは先に述べた。その中の一つとして、大学は地域を支える専門人材の育成において大きな役割を果たしており例えば、地域の学校を担う教員の養成について、国立大学44校の教員養成学部の入学者のうち約53%が各学校の所在都道府県の出身者であり、卒業者の約62%が各大学の所在都道府県の公立学校の教員として就職していると報告されている¹⁾。その他にも酪農学園大学では、酪農を専門とする人材を育成し北海道の酪農産業の振興に寄与していることや、琉球大学では、平成17年より観光を専門とする学科を設置し、沖縄県の経済を牽引する観光産業を支える人材を育成するなど、人材育成による地域貢献をおこなっている¹⁾。

純真学園大学では、先の本学の歴史背景から述べたように、九州ではもっとも古くから准看護師・看護師の養成を行い地域の医療に貢献してきた。そのような背景のもと平成23年に誕生した保健医療学部では看護学科、放射線技術科学科、検査科学科、医療工学科を備え、毎年入学者の約80%が九州出身者で占められている。昨年度卒業した1期生の就職先は看護学科で63%（53名）、放射線技術科学科は70%（23名）、検査科学科は83%（43名）、そして医療工学科で88%（15名）が九州圏内の病院や検査センターに就職し、九州地域の医療に大きく貢献している。

次に「知の拠点」として大学による地域貢献として、本学でも比較的取り組みやすい公開講座を企画し、平成25年から毎年開催してきた。他大学と異なる点は、講義の延長としての講座ではなく、本学教員の専門とする分野から、地域の方々の役に立つ医療における検査や治療などのテーマを取り上げ、一般の方目線でわかりやすく、講演形式で実施することである。ただ、企画の段階では数百人規模の参加を見込んで計画・実施しているが、学外からの参加人数は初会の25年度は44人、2回目が24人、そして平成27年度が34人と、いまだ少ない。また、学術講演会では参加者の対象や講師が公開講座と異なるものの、地域貢献となる保健医療学の「知の還元」を行うという、その基本的な背景は変わらない。学術講演会も今年度で3回目（平成28年2月13日に開催予定）となるが、学生や本学教職員を含めた参加人数は第1回目が480名、2回目が543名と非常に多い。しかし、学外からの参加者に注目すると、第1回目が64名、2回目が41名と本学が目標とする数字にはまだ及ばない。公開講座および学術講演会の広報の手法や、参加者より記入いただいたアンケートを分析した結果などを基にして、広報委員会や下部組織の実行委員会にて改善点を検討し次回の企画等に反映はしているものの、参加者の著しい増加には今のところ至っていない。

今後、公開講座では他大学が行っているような1テーマを複数回（3～5回）にわたる講義形式を採用することで少ない参加人数でも、本学に来ていただくトータルの人数を増やすことで地域への貢献度を増す方法や、開催場所を参加しやすい天神地区にするなど視野に入れて検討することも必要であろう。

学術講演会では、学外の最先端の研究を行っている講師を招聘しているために回数を増やすことは難しい。講演内容を目にして、聞いてみたいと思うものの、実際に会場に足を運ぶまでには至らないという声も聴く。臨地実習先の職員の方々がより参加しやすい時期、時間、場所そしてテーマなど再度検討する必要もあると考える。ただ、この学術講演会は他大学が実施していないユニークな企画であるとわれわれは考えており、長く続けることで認知度も高まり参加者も徐々に増えることも期待される。

サイエンスキャンプは将来の日本における科学技術を担う子供たちの育成・推進を目的に、文部科学省が始めた事業である。本学でも、医科学・医療分野に興味を持ってもらいたい、そして科学者になりたいと思う子供たちを増やしたい、そのような目的で始めた地域への社会貢献の事業の一つである。平成27年度も8月に開催し、4回目が無事に終了した。初年度は受講対象を福岡県内の高校1～2年生としていたが、2014年からは中学校の理科担当教諭から参加希望があり、中学生へ医療そして科学分野の楽しさが波及することも期待している。国の事業としては平成26年度に終了したサイエンスキャンプである

が、本学では継続して毎年学生が夏休み期間中の7～8月に開催し地域貢献を継続していく予定である。

大学が果たすべき役割として、「教育研究の成果を広く社会へ提供すること」が新たに位置付けられ、各大学でいろいろな形で地域貢献を行っている^{13) - 15)}。そのような背景で本学が取り組んでいる地域貢献の3つのイベントを紹介したが、本学の地域貢献のバックボーンは、やはり学祖、福田昌子の建学の精神「気品・知性・奉仕」を学園訓とする「奉仕」の精神であると考え、本学の学生も地域貢献として積極的にサークルを通じて、学校周辺地域における清掃活動のボランティアや、地域のイベント参加など継続して行っている。そして保健医療の専門大学として教員ができる奉仕活動は、地域社会に予防医学や最先端医療技術の「知の還元」を長く続けていくことであり、それがひいては地域社会の健康増進に繋がり、真の意味での地域貢献となりうると考える。

6. まとめ

平成23年に開学した純真学園大学は、保健医療を専門とする新設の大学として、「公開講座」「学術講演会」そして「サイエンスキャンプ」という、3つのイベントを通して地域社会に貢献している。開学2年目から始めた「サイエンスキャンプ」では、福岡県内の高校生そして中学生の理科教諭に対して、本学教員による医療・科学分野における知の還元を、また、開学3年目より始めた公開講座でも本学教員による専門領域での講義を通して地域住民を対象とした知の還元を行ってきた。学術講演会では、世界の最先端で活躍されている講師を学外より招聘して、九州地域における臨地実習先の先生方を対象とした、より専門的な「知の還元」を行ってきた。今後、5年、10年そして15年と時代の要請に合わせて対応・変化させながら、この3つの事業を継続していくことこそ、本学の地域貢献であろう。

<謝 辞>

本紙面で紹介した3つの事業に常にご理解を示し、積極的に参加・ご協力いただいている福田庸之助学長に心から感謝申し上げます。また、本事業の立ち上げ、そして常に斬新なアイデアを頂く加藤亮二副学長にお礼申し上げます。最後に、実習や講義そして研究と多忙な中、本事業の企画・運営に携わっていただく本学教員の先生方、そして事務職員の方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

<参考文献>

- 1) 平成20年度文部科学白書平成、第1部第2章第2節、34-46
- 2) 長田 進. 大学の地域貢献についての一考察とその事例. 慶応義塾大学日吉紀要. No.19, 15-28, 2008.
- 3) 伊藤 恒敏. 医師不足・医療危機・医療崩壊からの地域医療の再生. 日本老年医学会雑誌, 46巻, 6, 503-507, 2009.
- 4) 厚生労働省: 医療施設調査・病院報告 2002.
- 5) 厚生労働省: 医師調査 2002, 2004.
- 6) 金村政輝, 伊藤恒敏, 本郷道夫, 他. 今後の医師集団の人口動態の変化—高齢化と女性医師の増加が変化の主体—. 日本医事新報, 436, 80-84, 2007.
- 7) 早川 佐知子. アメリカの病院における医療専門職種の役割分担に関する組織的要因. 海外社会保障研究, No.174 4-15, 2011.
- 8) 久留米大学ホームページ 公開講座: <http://www.mii.kurume-u.ac.jp/shien/koukai-d.htm>
- 9) 筑紫女学園大学ホームページ 公開講座: <http://www.chikushi-u.ac.jp/campaign/lecture/>
- 10) 科学技術振興機構 (JST) ホームページ: <http://www.jst.go.jp/cpse/sciencecamp/outline/index.html>
- 11) KEK ホームページ: <http://www.kek.jp/ja/Education/HighSchool/ScienceCamp/>
- 12) 新井正一. 未来の科学者教育: サイエンスキャンプを実施して. 純真学園大学雑誌, 4, 117-125, 2014.
- 13) 松坂 浩史. 特集 国立大学法人化とその周辺 大学の社会貢献のあり方 国立大学法人の果たす機能と役割. Between, contribution3, 2003.
- 14) 山科 満. 大学の社会貢献 一学生のボランティア活動に接して考えたこと一. 教育×ChuoOnline: <http://www.>

yomiuri.co.jp/adv/chuo/opinion/20140317.html

- 15) 長谷川 誠, 大学の地域貢献に関する一考察—スポーツによる地域連携に注目して—, 佛教大学教育学部学会紀要, 第9号, 211-222, 2010.